様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６６７１０３１

研究課題名（和文）親の育児ストレス調査から20年目の実態把握と「親であること」を支える指針づくり

研究課題名（英文）Examining the differences in the parenting stress experienced by parents today and twenty years ago: Developing the guideline to support for parents to "being parents"

研究代表者
奈良間　美保（Narama, Miho）

名古屋大学・医学系研究科（保健）・教授

研究者番号：４０２０７９２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、乳幼児の親の育児ストレスの特徴、20年前の育児ストレスとの相違を明らかにすることであった。国内5地域で、一部改変を加えた日本版PSI、デモグラフィックデータ、ソーシャルサポートからなる無記名自記式質問紙による調査を、研究者の所属機関の倫理審査の承認を得て行った。母親1507名、父親816名から回答が得られ、回収率19.3%であった。このうち東海地区A県の母親329名のデータを分析した結果、母親の育児ストレスの因子構造は20年前と大きな違いはなかった。子どもの年齢、きょうだいの有無、経済状況についての母親の捉え方と育児ストレスとの関係が見出され、育児支援の課題が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the characteristics of the stress experienced by parents of infants today and to compare with those experienced by parents twenty years ago. The anonymous self-administered questionnaire set including the partially revised Japanese version of PSI, demographic data, and a social support questionnaire were distributed to parents in five locations in Japan. Responses from 1,507 mothers and 816 fathers were obtained (response rate = 19.3%). Data obtained from 329 mothers from Prefecture A in Tokai Region were analyzed. No major difference was observed in the factor structure of the parenting stress experienced by mothers today and those of mothers twenty years ago. Additionally, significant relationships between parenting stress and children's age, number of siblings, and perceptions about household incomes suggested that health and welfare policy for parents with young children should be improved.

研究分野：小児看護学

キーワード：育児ストレス　育児支援　親役割　家族

１．研究開始当初の背景

(1)日本の少子社会とその対策：日本の高度成長化に伴い、人の価値やライフスタイルは多様化し、女性の就業率上昇や核家族化の進行等により少子社会を迎えている。1994 年のエンゼルプラン以降、子育て期の家族を支える政策が講じられているが、合計特殊出生率には必ずしも目ざましい改善を認めない。子育て期の家族を支えるためには、親自身が子どものことや親である自分自身のこと、家族のことをどのように捉えているのかを知ることが、親であることを支える方策の検討につながると考えた。

(2)親の心理社会的状態：育児期にある親の心理的特徴については、愛着形成や育児不安、ストレスなどから検討されてきた。1880 年代、米国の心理学者 Abidin は親の育児に伴うストレスの程度を要因別に明らかにする尺度 Parenting Stress Index(以下、PSI)を開発した。兼松を代表とする研究グループは 1990 年代に育児ストレスの国際比較研究（Krulik T et.al,1999）に参加し、101 項目の原版 PSI から 78 項目の日本版 PSI を作成し、信頼性・妥当性の検討（奈良間他、1999)、育児ストレスの要因として子どもの健康状態、ソーシャルサポートとの関係に関する研究に取り組んだ。さらに、日本で使用できる尺度として日本版 PSI の手引きを作成し、日本の母親の 3～47 か月児の母親の標準スコアを提示した（荒木，2008)。最近では早期産児の親の育児ストレス調査の対照群として健常児の親の調査が報告されているが、現代の親への大規模調査の報告は認められない。さらに、2012 年には原版尺度の見直しが行われ、現代の親に適した表現への改訂、並びに父親を含めた各年齢の標準値が示された。この PSI-4 を参考に、日本版 PSI に必要な改訂を加えることで、現代の親が抱える育児ストレスの実態がより浮き彫りになると考えた。また、インタビュー調査による質的データ分析から、子どもや親自身、家族に対する親の認識の多様性を捉えることで「親であること」そのものを包括的に支えるための基礎資料を提示することを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的を以下に示す。

(1)現代の乳幼児の親の育児ストレスの特徴と要因を明らかにする。

(2)育児ストレスとその要因について、20 年前の結果との相違を検討する。

(3)育児ストレスの程度と親の感じ方の質的分析から、親であることを支える指針の基礎資料を得る。

３．研究の方法

(1)日本版 PSI 改訂の取り組み：PSI-4 の改変に基づき日本版 PSI の項目について検討した。「夫」の表現を「パートナー」に、時期に関する「この子を産んでから」の表現は「この子を育てるようになってから」或いは「親になってから」に変更することで、対象を母親から父親にも広げるとともに、多様な家族形態に対応する内容とした。その他の項目の修正も含め日本版 PSI の暫定修正版を作成した。

(2)予備調査：A 県内の 9 組の夫婦に調査を依頼し、表現上の問題が認められた一部の項目にさらなる修正を加えた。

(3)本調査：東北・関東・中部・関西・四国地域において 0 歳～6 歳の未就学児の母親及び父親に対する質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、暫定修正版 PSI、属性、ソーシャルサポート等であった。子育て支援事業、乳幼児健診、および保育園において、親に調査票、調査説明書、切手付返信用封筒を配布し、質問紙への回答と郵送による返信を依頼した

(4)分析方法：属性は記述統計、PSI については因子分析による構成概念妥当性、クロンバックα係数による内的整合性等を検討した。統計的分析には SPSSver.21 を用いた。

(5)倫理的配慮：研究者の所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

(1)対象の概要

2部ずつ封入された調査票を6014組配布し、母親から 1507 部（回収率 25.1%）、父親から 816 部（回収率 19.3%）の回収がそれぞれあった。両親ともに回収された質問紙は 722 組（12.0%）であった。

現在、データ分析中であるため、分析が進んでいる中部地区Ａ県の母親の調査結果の概要を以下に示す。

(2)中部地区Ａ県の母親の調査結果

①対象の概要：母親に調査票 1441 部を配布し、334 名から回答が得られ(回収率 23.2%)、有効回答は 329 部であった。母親の年齢は 20 代 53 名（16.1%），30 代 235 名（71.4%），40 代 41 名（12.5%）であった。対象となる子どもに同胞なしが 217 名(66.0%)、年齢は 0 歳 138 名(41.9%)、1～3 歳 162 名(49.3%)、4～6 歳 29 名(8.8%)であった。核家族は 303 名(93.2%)、拡大家族 14 名(4.3%)、ひとり親家庭が 8 名(2.5%)であった。

②構成概念妥当性：日本版 PSI を参考に因子数を設定しバリマックス回転を行い、因子負荷量 0.3 以上を目安に採択した。その結果、子どもの側面 38 項目から 7 因子が抽出された。日本版 PSI と概ね類似する因子構造であったが、[C7 刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい]の項目「私の子どもは、小さなことにも腹をたてやすい」を「私の子どもはとても感情の動きが激しく、腹を立てやすい」に修正した結果、[C2 子どもの機嫌の悪さ]でも高い因子負荷量を示した。また、修正を伴わなかった項目として[C3 子どもが期待通りにいかない]の「子どもがすることで、私がとても気になることがいくつかある」は[C6 子どもに問題を感じること]に、[C5 親につきまとう／人に慣れにくい]に含まれた項目の「ふつうの子どもと比べて、私の子どもは計画の変更や、家のまわりの変化に慣れにくい」は「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」でもそれぞれ高い因子負荷量を示した。親の側面 40 項目からは 8 因子が抽出された。日本版 PSI とほぼ同様の因子構造であったが、[P6 退院後の気落ち]に含まれた項目「子どもを連れて退院した時、私は親としてこの子を扱えるか自信がなかった」を「私は、親としてうまくやれるか疑問に思うことがよくある」に修正した結果、[P4 親としての有能さ]でより高い因子負荷量を示した。

③内的整合性：日本版 PSI の構成によるα係数は、総点、子どもの側面、親の側面でいずれも 0.9 以上を示した。

PSI-4 に基づき日本版 PSI の一部に修正を加えて調査を行った結果、日本版 PSI とほぼ同様の因子構造であり、尺度として一定の信頼性および妥当性を確認した。しかし、因子構造の一部に 20 年前の調査と異なる特徴が認められ、今後より詳細な検討を行い、親の育児ストレスを効果的に測定する改訂日本版 PSI の開発に取り組むことが課題である。

④育児ストレスの関連要因

子どもの年齢を拡大した結果、4～6 歳児をもつ母親の育児ストレスの特徴が新たに見いだされた。さらに、母親の育児ストレスと家庭の経済状況のとらえ方との関係も新たに見いだされ、支援の方向性に示唆を得た。

＜引用文献＞

① 荒木暁子、兼松百合子他、一般社団法人

雇用問題研究会、第2章PSI育児ストレスインデックス-日本版Parenting Stress Index-標準スコアと各県のスコアの特徴、PSI 育児ストレスインデックス手引、2008、45-48,.
② Krulik T et.al(1999)、Parenting stress and mothers of young children with chronic illness-cultural study、Pediatric Nursing、Vol.14、No.2、1998、130-140.
③ 奈良間美保、兼松百合子　他、日本版Parenting Stress Index(PSI)の信頼性・妥当性の検討、小児保健研究、Vol.38、No.5、1999、610-616.　他

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
奈良間 美保(NARAMA, Miho)
名古屋大学・医学系研究科・教授
研究者番号：４０２０７９２３

(2)研究分担者
兼松 百合子（KANEMATSU Yuriko）
岩手県立大学・看護学部・名誉教授
研究者番号：２００９１６７１

(3)研究分担者
白畑 範子（SHIRAHATA Noriko）
岩手県立大学・看護学部・名誉教授
研究者番号：６０２９５３８４

(4)研究分担者
丸 光惠(MARU Mitsue)
甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授
研究者番号：５０２４１９８０

(5)研究分担者
松岡 真里(MATSUOKA Mari)
高知大学・教育研究部医療学系看護学部門・准教授
研究者番号：３０２８２４６１

(5)研究分担者
山本 弘江（YAMAMOTO Hiroe）
愛知医科大学・医学部・准教授
研究者番号：８０２５１０７３